

「黒」と「白」とを見事に操る、知られざる鬼才ふたたび

マリオ・ジャコメッリ 写真展

MARIO GIACOMELLI

THE BLACK IS WAITING FOR THE WHITE

2013 年 3 月 23 日（土）－5 月 12 日（日）

東京都写真美術館

主催：青幻舎、NADiff、PARCO

共催：東京都写真美術館

Author: Mario Giacomelli

Title: Io non ho mani che mi accarezzano il volto

Year: 1961-63

© Archivio Mario Giacomelli, Senigallia



はじめに

2008 年東京都写真美術館において初めて本格的に紹介されたマリオ・ジャコメッリ。

「黒」と「白」とを見事に操り、強烈なハイ・コントラストで「死」と「生」に立ち向かい、孤高の写真表現で現実（リアル）を抽象した 120 余点は、NHK 新日曜美術館でも特別番組が制作されるなど、日本ではほとんど無名の海外作家の展覧会でありながら多くの来場者を迎え、大成功をおさめました。

2 回目にあたる本展覧会は、「ホスピス（死がやって来てお前の目を奪うだろう）」、「スカンノ」、「神学生たち（私にはこの顔を撫でてくれる手がない）」、「善き大地」などの代表作を中心に作品数を 220 余点と大幅に増やし、作家の本質へ切り込む構成となります。

ジャコメッリは、1 枚の素晴らしい写真で何かを語るのではなく、組み合わせられた写真群で事物の本質へ迫ろうとする写真家です。そのような作家の営為の延長線上に今回の展覧会は位置づけられます。

作品相互の関係が響きあうことにより、ジャコメッリ理解の深化をはかり、単なる回顧ではなく、現在尚写真表現の未来をも指し示しているジャコメッリの作家、人間双方の本質を明らかにする展覧会にご期待下さい。

MARIO GIACOMELLI

展覧会概要

マリオ・ジャコメッリ 写真展

THE BLACK IS WAITING FOR THE WHITE

開催概要

会期 2013年3月23日(土)～5月12日(日)

会場 東京都写真美術館 B1 階展示室

開館時間 10:00-18:00(木・金は20:00まで、入館は閉館の30分前)

休館日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館。但し4月30日(火)は開館)

観覧料 一般 1,000(800)円/学生 800(640)円/中高生・65歳以上 600(480)円

※()は20名以上の団体および東京都写真美術館友の会会員

※小学生以下および障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

※第3水曜日は65歳以上無料

主催 青幻舎、NADiff、PARCO

共催 東京都写真美術館

後援 イタリア大使館、イタリア文化会館

会場お問い合わせ 東京都写真美術館 TEL: 03-3280-0099 HP: www.syabi.com

総合お問い合わせ パルコ TEL: 03-3477-8820

文：アレッサンドラ・マウロ (FORMA アーティスティック・ディレクター)

20世紀ヨーロッパの申し子であるマリオ・ジャコメッリは、1920年代にイタリアのマルケ州にあるセニガッリアに生まれました。セニガッリアはアドリア海に面した町です。アドリア海には、幻想的なストーリーの語り手を形作る力があるのかもしれませんが。ちなみに、どの土地でもどの時代でも理解されるストーリーを創造したフェデリコ・フェリーニもアドリア海のほとりに生まれています。

貧しい家庭に生まれたジャコメッリは、幼少にして父親を失うというトラウマを負うことになります。3人兄弟の長男で、町のホスピスで洗濯婦の仕事を見つけた母について、小さな時からホスピスに出入りしていました。人生の終わりという残酷な光景、抗うことのできない老いを目の前に彼の性格が形成されていきます。これが彼の美に対する感性以前に、将来を予兆させるものとなります。

ジャコメッリは若くして印刷の仕事を始めます。経済的な理由はもちろんですが、それは彼の選択でもあり、生涯この仕事を続けることとなります。名刺、レターヘッドなどの印刷をしていく中で、白地に活字で記される黒、光と影がくつきりと織り成すありさまに慣れ親しんでいきました。写真が彼の生活に飛び込んできたのは1950年代のことでした。それはほぼ偶然だったのですが、彼の生活を大きく変えることとなります。



「スカンノ」より
© Archivio Mario Giacomelli, Senigallia

MARIO GIACOMELLI

彼の持つ創造への意欲をすべて吸収し、強烈な知的活力の為さまざまな経験、発言、メタファーをそこに集積していきます。それは凡庸ではない、まれにみるオリジナリティーを持つものでした。

印刷所での仕事と並行して、日曜日にはカメラを手に近隣の丘陵地帯を歩き回り、夜は夜で現像に時間を費やしました。

マリオ・ジャコメリの作品は、驚くほどにさまざまな写真ですが、その大部分はある着想を強い核として構成された連作となっています。

自身が夜間に暗室で長い時間をかけて現像したプリントは、トリミングや覆い焼き、多重焼き付けなどの試行錯誤の成果です。一枚一枚のプリントに現れたくっきりとしたライン、根源的な感情、突き詰められた思いの中には、たぐいまれな一貫性と詩情、幻想的な力が見て取れます。

最初の写真作品として知られるのは、フォルム的に申し分のない静物と、母および妻の肖像ですが、既にそこにはたぐいまれな観察力が見て取れます。また風景写真は、彼の作品の中でも最も大きな分量を占めます。

多くの丘陵の写真は、その頂に登り、あるいは飛行機で上空を飛びながら撮影されました。生涯を通じて、大地とそこに刻まれた畝の描くラインの中に人間存在の証しを捉えようとします。人間経験の何よりもの証しである労苦の印をそこに見ているのです。

ホスピスにも、成人してから再びカメラを手に戻ることになりました。自分の身を守るようにカメラを構えながら、幼少期の亡霊たちに形を与え、苦悩や孤独、老人たちの動作を記録し、そこで見られる光景を更に心に強く訴えるものになっています。

それにしても苦悩は、彼が決して避けて通らなかった感情であり、むしろそれを積極的に求め、写真の中で昇華させようとしているように思えます。それは例えば「ルルド」といった作品にみられます。治癒を願う病人たちの行列は、叶わぬ希望の悲しい証しです。

神学生達が雪の中で陽気で無邪気にマントを翻しているあの有名なシルエットも同じです。彼らの単純で儚く陽気な動きは、苦悩の裏の顔だからです。苦悩は直接表には現れていませんが、はっきりと知覚できます。動き回る彼らを観察する私たちは、彼らの踊りがいかに儚いものかを知っているのです。

ジャコメリは、「プーリア」、「善き土地」という連作に見られるように、農夫たちのリズムにも強く惹かれ、農業の世界の中に過去への回帰を求めています。しかしその過去はジャコメリが実際に属したものではないのです。同じように「スカンノ」では、アブルッツォ州の山間の町スカンノの通りに、かつてのリズムを、自分の回想の中の村のリズムを見つけようとします。

マリオ・ジャコメリの活動は、2000年11月に死を迎えるまで続けられます。新しい世紀に達したくない、自分に合った20世紀に留まりたいとでもいうような最期でした。



「私にはこの顔を撫でてくれる手がない」より

© Archivio Mario Giacomelli, Senigallia

MARIO GIACOMELLI

ここまで挙げた作品の他には、有名な詩を写真に移し替えようとしたものがあります。レオパルディの詩に触発された「シルヴィアへ」、エミリー・ディキンソンの詩による「私は何者でもない」がそれです。彼にとっては詩句こそが、形あるものを作り出していくための濃密で強力な核のようなものになっていたことが、これから分かります。

さらに、「ホスピス」や「神学生たち」といった有名な連作の中には、彼自身が詩のタイトルをつけて呼んだものもあります（前者はチェーザレ・パヴェーゼの「死がやって来ておまえの目を奪うだろう」、後者はダヴィッド・マリア・トゥロルド「私には顔を撫でてくれる手がない」）。詩句と写真がまるで呼応しているようではありませんか。



「スカンノ」より
© Archivio Mario Giacomelli, Senigallia

ジャコメッリの写真は何世代もの写真家たちに影響を与えました。彼らはモノクロの強いコントラスト、苦悩を詩的で奥深く普遍的なものにする彼の力にうたれ、そこに写真を追及する意味を見出すのです。マリオ・ジャコメッリは、国際的にみても最も独創的な作家の一人であり、死後 10 年を経た今でも、新たな側面、新たな連作、新たな写真などの貴重な遺産が彼のアーカイブから発掘されています。

今回の展覧会では、彼の最も有名な連作(ホスピス、スカンノ、神学生たち、ルルド)を、ジャコメッリ自身が望んでいた形で展示します。それだけではありません。今まで紹介されていない抽象的な写真群が展示されますが、これらはいわばジャコメッリが制作活動の源としていた「貯蔵庫」のようなもので、非常に魅力的かつきわめて個人的な作品と言えます。

まるで全体が一つの詩であるかのように、マリオ・ジャコメッリの写真たちは見る人たちの中をめぐります。すべての写真が、大地の質感で練られ、痛いような白と黒のコントラストを持ち、過去の経験のまだ癒えない傷口をつきつけます。

暗室での時間をかけた綿密な作業によって作り上げられた質感は、まるで手で触れることができます。それがさまざまな写真のテーマや対象、印画紙の上のさまざまなフォルムを通じて、人間の存在というものをユニークな形でしっかりと伝えてくるのです。

<展覧会キュレーター プロフィール>

Alessandra MAURO | アレッサンドラ・マウロ

ジャーナリスト、写真作品のキュレーターとして、これまでウィリアム・クライン写真展「Rome」、マリオ・ジャコメッリ写真展「Retrospective」、ミンモ・ジョディス写真展「Lost in seeing」など数々のプロジェクトを手がける。

2005年より、ミラノを拠点とする FORMA(フォルマ)社のアーティスティック・ディレクターとして展覧会の企画プログラミングを担当。

リチャード・アヴェドン、ジョセフ・クーデルカ、ピーター・リンダー、アンリ・カルティエ・ブレッソン、マーティン・パー、ベッティナ・ランズなど、数多くの作家の個展を企画した。

また、ローマの出版社コントラスト・パブリッシング・ハウスの編集ディレクターとしても活動。編集を手がけた主な著書に、「My brother 's keeper: Documentary Photographers and Human Rights」、「Shadows of War」がある。文学、歴史学を修了、現在ナポリのスオール・オルソラ・ベニンカサ大学で写真史の教授として教鞭を取り、後進の育成にもあたっている。

MARIO GIACOMELLI

< 展覧会関連書籍の発売について >

本展覧会の展示作品を中心に収録した作品集を刊行致します。

青幻舎 『マリオ・ジャコメッリ 黒と白の往還の果てに』(ソフトカバー版)

予価：本体 3,500 円 刊行予定：2013 年 3 月頃

※表紙デザインは変更の可能性がございます。



【広報用写真】素材の高解像度データをご希望の方は下記広報担当：info@tmpress.jp までお問合せ下さい。



① 「私にはこの顔を撫でてくれる手がない」 より

Title: Io non ho mani che mi accarezzano il volto

Year: 1961-63

© Archivio Mario Giacomelli, Senigallia



② 「スカンノ」 より

Title: Io non ho mani che mi accarezzano il volto

Year: 1961-63

© Archivio Mario Giacomelli, Senigallia



③ 「スカンノ」 より

Title: Da Scanno

Year: 1959

© Archivio Mario Giacomelli, Senigallia

MARIO GIACOMELLI



④「ルルド」より

Title: Lourdes

Year: 1957

© Archivio Mario Giacomelli, Senigallia

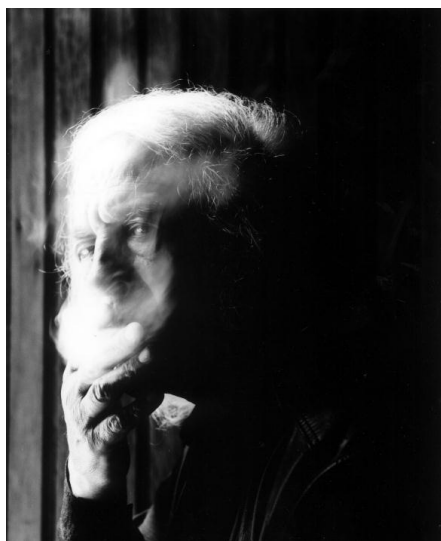


⑤「自然についての認識」より

Title: Da Presa di coscienza sulla natura

Year: 1977-2000

© Archivio Mario Giacomelli, Senigallia



⑥マリオ・ジャコメッリ ポートレイト写真

Mario Giacomelli fotografato

Year: 1999

© Guido Harari/Contrasto



⑦マリオ・ジャコメッリ スタジオにて

Mario Giacomelli fotografato

Year: 1999

© Guido Harari/Contrasto

<お問合せ先>

株式会社パルコ エンタテインメント事業部

TEL 03-3477-7921 FAX 03-3463-8695

担当：中西幸子 naka-sati@parco.jp 三宅彰 areacode81607@gmail.com 手塚千尋 tedu-tihi@parco.jp

<広報お合せ先>

TAIRA MASAKO PRESS OFFICE

望月 (Mobile 090-2445-3808)

平 (Mobile 090-1149-1111)

Email: info@tmpress.jp Fax 03-3468-8367